



平成 28 年 9 月 16 日

岡山大学 科学先取りグローバルキャンパス岡山公開講座 高校生のための「知る・触れる『生殖医療』」を開催

～^{にんよう}妊孕性って何？体外受精の成功率は 100%？～

現在、6 組に 1 組の夫婦は不妊症であり、3 組に 1 組の夫婦が「不妊ではないか」と不安を抱いたことがあるとされます。2012 年に国内の医療機関で約 32 万 6 千回の体外受精が行われ、3 万 7,953 人の子どもが生まれました。つまり、生まれた子どもの約 27 人に 1 人が体外受精によって誕生したことになります。

妊孕性とは「妊娠のしやすさ」のことで、年齢とともに低下します。「卵子の老化」という言葉が一般にも広がりましたが、社会に出る前の学生時代に、そのような知識を持ってライフプランを考える機会は少ないのが現状です。また、生殖医療への過剰な期待もあり、体外受精を行えば、誰でも妊娠するとの誤解も見られます。

今回の公開講座では、妊孕性や生殖医療に関する基礎的な知識を持った上で、近年、現実社会で行われている健康な人々が行う卵子や精子の凍結保存、精子や卵子の提供、代理出産など、生殖医療の現場における倫理的課題についても考えます。また、精子や卵子を観察するとともに、卵子の凍結保存など、胚培養士（エンブリオロジスト）が行う最先端の生殖医療の技術を体験します。

1. 背景

近年の晩婚化の影響もあり、妊娠を希望した時には、高齢のために妊娠しにくくなっている（妊孕性が低下している）女性が増えています。このため、妊孕性や生殖医療の基礎的な知識を持つことは、社会人にとって必須と考えられます。しかし、実際には、そのような状況になって初めて、自身の年齢では体外受精を行っても妊娠率が低いことを知って驚いたり、中には、後悔したりする例も見られます。

従来、卵子の凍結保存は、がん患者における化学療法や放射線療法に伴う卵巣機能の低下に備えるために行われてきましたが、現在は、「適当なパートナーがない」「仕事に打ち込みたい」などの理由でこの技術を利用する健康な女性も増加しています。さらに、現実には精子や卵子の提供、あるいは、代理出産などの生殖医療に関わる倫理的課題に直面する人々も増えています。このような現状からも、社会に出る前に正しい情報に接し、種々の選択肢を知った上でライフプランを立てることは重要です。

胚培養士は、不妊治療（生殖医療）、特に人工授精や体外受精の中で精子や卵子を扱うため、「生命のはじまり」に関与します。本学では、2013 年、医学部と農学部が連携（医農連携）して養成コースを開設し、十分な知識と技術、そして、倫理観を持った胚培養士を輩



PRESS RELEASE

出しています。

今回の公開講座では、高校生を中心に、妊孕性や生殖医療に関する基礎知識、生殖医療の現場における倫理的課題を知ってもらい、胚培養士の仕事を体験してもらいます。中学生や一般の方々の参加も可能ですので、学校で生物の授業や性教育を担当する教員の参加も歓迎します。

2. イベント概要

■名称 岡山大学 科学先取りグローバルキャンパス岡山公開講座
 高校生のための「知る・触れる『生殖医療』」

■日時 平成28年10月10日（月・祝）13:30～16:00

■会場 岡山大学鹿田キャンパス 岡山大学 Jホール

■プログラム

13:30～14:30 講演「知る・触れる『生殖医療』」＋質疑応答

岡山大学大学院保健学研究科

岡山大学病院産婦人科

岡山大学生殖補助医療技術教育研究（ART）センター

中塚 幹也

14:40～16:00 体験授業「胚培養士の仕事を模擬体験」

岡山大学生殖補助医療技術教育研究（ART）センター スタッフ一同

<お問い合わせ>

岡山大学大学院保健学研究科

教授 中塚 幹也

（電話番号）086-235-6538

（FAX番号）086-235-6538